

第 14 冊

『平城京 全史解説』

～正史・続日本紀が語る意外な史実～

大角修、学研新書、2009年

(中)

天平のパンデミック

この原稿を書いている現在、**新型コロナウイルス感染症**で世界中が「**パンデミック（感染症の大流行）**」に陥っています。令和2年（2020）4月20日の段階で、世界で247万人超の感染者、17万人超の死者が、日本では1万1000人超の感染者、260人超の死者が出ています。

その渦中にある我々は、この騒動がいつ終わるのか、ワクチンはいつできるのかなど不安な気持ちで日々の生活を送っています。

実は、奈良時代にも疱瘡＝天然痘によるパンデミックが起きました。天平9年（737）に始まった**天平のパンデミック**は、平城京の人口の半数近くの命を奪ったとか、**日本全国で100～150万人もの死者**を出したとかいいます。これは当時の**日本総人口の25～35%**にあたる、信じられないような膨大な数になります。4人に1人か、3人に1人が亡くなったというのは驚きです。

すでに触れたように、疱瘡（天然痘）の大流行によって藤原四兄弟全員が死へと追い遣られてしまいました。まさに、奈良時代のターニングポイントとなったパンデミックでした。政治の中枢にいた四兄弟が亡くなったのですから、政治機能がマヒするのは当然の事でしょう。

藤原四兄弟だけではありませんよ。天然痘が流行する前に**92名だった公卿達が、流行後には56名に減少した**というデータもあります。実際に罹患した人数は不明ですが、トップクラスの公卿達の内、3分の1が亡くなったということになります。

当時の環境や栄養状態を考えると、庶民が天然痘にかかったら、半数以上が亡くなったとしても不思議ではありません。とにかく非常に高い致死率から考えて、このパンデミックの原因が、疱瘡＝天然痘だったといえるのです。

現在大流行している新型コロナウイルス感染症ですが、たくさんの方が亡くなっても、私にとって「他人事」でした。でも、志村けんさんが亡くなったというニュースが伝わってから、一気に「自分事」になりました。

当時の聖武天皇にとってこのパンデミックは非常に恐ろしいものに思えたでしょう。なにせ、光明皇后の兄たちがバタバタと亡くなっていったのですから。「次は自分か？」と恐怖を覚えていたのではないのでしょうか。

幸いなことに、天平10年にパンデミックは終息を迎えます。でも、いつ復活するかわかりません。相手がどういう存在なのかがわからないのですから、恐怖心が小さくなることはないでしょう。

ですから、生かされた聖武天皇は、仏教に没頭します。大仏建立の詔、国分寺建立の詔などを矢継ぎ早に発し、仏教の力でこの危機を乗り越えようと必死になりました。

その聖武天皇の動きをみていきましょう！！ その前に、奈良時代の権力者の7組の変遷を頭の中から離さないようにしてください。7組の権力者とは

藤原不比等 → 長屋王 → 藤原四兄弟 → 橘諸兄 → 藤原仲麻呂 → 道鏡 → 藤原百川

でしたね。そして、今回扱うのはアンダーラインの二人の時期で、聖武天皇の時代が中心です。

聖武天皇の遷都・大仏造立

大角修氏は『平城京 全史解説』のなかで、藤原広嗣の反乱の後の聖武天皇の「動き」について書いています。

天平12年(740)10月29日に平城京を出た聖武天皇は、11月3日に藤原広嗣の捕縛を知った後も行幸を続けた。伊勢から尾張へ、さらに美濃へ行き、12月1日から6日まで不破の頓宮(とんぐう、関ヶ原のあたり)にとどまる。ここで平城京脱出の時から護衛してきた騎兵400人を解散し、都に帰還させた。

しかし、天皇は平城京に戻らない。6日、橘諸兄を山背国に先発させ、恭仁の土地を整備させる。同日、天皇も出発し、12月14日に山背国の玉井（京都府井手町）についた。翌15日、天皇はここまで同行してきた元正太上天皇と光明皇后を玉井頓宮におき、先に恭仁に入った。恭仁京には甕原（みかのはら）離宮があったのだが、上皇と皇后を迎えるには、まだ内裏の準備ができていなかったのだろう。

このあわただしい遷都の背景には、天皇も貴族たちも皇親勢力と藤原勢力の狭間で揺れ動く状況があった。この時期は元正太上天皇と橘諸兄が皇親勢力、光明皇后と藤原南家の仲麻呂が藤原勢力の中心だった。そして広嗣の乱を機に、橘諸兄が藤原色の強い平城京を廃するために遷都をはかったというのが、ほぼ定説である。山背国の玉井には諸兄の別荘があり、恭仁京のあたりは諸兄の勢力圏だったという。

.....

まさかの遷都は、その後も慌ただしい。閏3月9日、平城宮の兵器を移し、15日には五位以上の貴族に今月中に恭仁京に移ることを命じた。・・・貴族らは数年にわたって右往左往させられ、へとへとになっただろう。そこを狙って第三の道を示したのが聖武天皇だった。

恭仁京では遷都まもない天平13年3月に、国分寺建立の詔を出す。そして天平14年8月11日、「朕（われ）将（まさ）に近江国甲賀郡紫香楽村に行幸（みゆき）せむとす」と詔し、すぐに離宮の造営に取りかかった。.....。天平15年7月16日に紫香楽へ行幸したときは、およそ4ヶ月も紫香楽宮にとどまり、10月15日、その地で毘盧遮那仏（大仏）造立の詔を出す。

翌日、東海・東山・北陸の25カ国の今年の調・庸の税すべてを紫香楽の宮に納めさせることにする。同月19日、毘盧遮那仏を造立するために寺地（甲賀寺）を開く。

一方、恭仁京でも新都の造営が続き、ついに大極殿が完成した。しかし、とたんに造営は中止になった。



こうして、3つの「都」があらわれました。橘諸兄ら皇親勢力の恭仁京、藤原氏の平城京、聖武天皇の都といえる紫香楽宮です。そして、さらに難波宮がありますよね。難波宮は瀬戸内海に臨み、交通の要衝に位置する別宮です。

天平16年（744）閏1月11日、聖武天皇は難波に行幸します。しかし、この前に聖武天皇は恭仁京が良いか難波宮が良いか、貴族たちから意見を聞いています。その答えは「恭仁京がいい」が圧倒的に多かったようです。

にもかかわらず、聖武天皇は難波宮に決定します。そして、この11日に聖武天皇の皇子安積（あさか）親王が桜井宮で脚の病にかかって帰京しますが、13日に亡くなります。わずか17歳でした。この親王は県犬養広刀自が生んだ皇子で、聖武天皇にとって唯一の息子でした。

皇太子には光明皇后の産んだ阿倍内親王が立てられていましたが、皇親勢力の諸兄らは安積親王を推していました。「脚の病」という不可解な死因は、藤原仲麻呂らによる毒殺ではないか、という説もありますが、どうなのでしょう。確かに、可能性はあります。

こうして、皇親勢力は後退を余儀なくされ、恭仁京からの撤退が始まります。2月1日には、天皇御璽と太政官印を恭仁京にとりにやらせ、役人たちも難波に招集されました。



恭仁京跡



難波京跡



紫香楽宮跡

ところがです。24日、なんと聖武天皇は上皇と橘諸兄を難波に残し、紫香楽宮に行ってしまうのです。それなのに、26日、留守の難波宮で橘諸兄を通して難波を「皇都となす」勅を宣告します。

えーっ、どういうことでしょうか？さらに、紫香楽では11月13日には甲賀寺で盧舎那仏の仏像の体骨柱（仏像を鑄造するための中型の木組みの柱）を立てます。11月14日には、元正上皇も難波から紫香楽へ行幸します。こうして、大仏造立の熱気とも相まって、紫香楽宮への遷都が既成事実化していきました。

そして21日には、ある人物を**大僧正**に任じます。大僧正は官僧の最高位で、この人物が最初です。

朝廷の官位でいえば、二位大納言の公卿に当たる高官なんです。

ここで、質問です。聖武天皇が大仏造立をめざして大僧正に任命した人物とは誰でしょうか？

そう、行基でしたね。

しかし、四月に入ると紫香樂宮周辺で火災が三度も起こります。それだけではありません。伊賀国でも山火事が起こり、燃え広がっていきました。これは紫香樂遷都に不満を持つ者の放火と言って良いでしょう。

さらに、天平17年（745）4月27日、一晩中地震が起こります。地震は三日三晩続き、美濃では国府の館や寺の堂塔、民家が崩壊する被害が出ます。

山火事と地震で不穏な5月2日、聖武天皇は太政官の諸司の官人を招集して、「どこを都にしたらよいか」と問います。当然のことですが、官人たちはみな「平城がよい」ということでした。4日には平城の薬師寺に使いを送って4大寺の僧を集めて、同じように問いますが、当然ながら全員が平城にすべきだと答えました。

こういう状況の中で、5月5日、ついに聖武天皇は恭仁京に向かうこととなります。そして11日には聖武天皇も平城京に戻ります。これによって天平12年10月に始まる5年間の遷都は終わりをむかえました。

ところで、都が

平城京 → 恭仁京 → 難波宮 → 紫香樂宮 → 平城京

のように動いていきました。これの語呂合わせを覚えていますか？

反乱で くに な し

でしたよ。

さて、聖武天皇が行った5年間の遷都騒動の意義は何でしょうか？

1つは、藤原氏の復権です。その後も橘諸兄は左大臣の地位にとどまりますが、藤原氏の復権は明らかでした。

2つめは、仏の威光によって大衆を動員し、いわゆる国家仏教の最盛期をもたらす基盤が作られた、ということです。

そして、これらの動きの中心にいたのが光明皇后です。そのため皇后が聖武天皇を操っていたのではないとも言われています。

でも、なぜ、聖武天皇は**毘盧遮那仏＝大仏**を造ろうと思ったのでしょうか？

そのきっかけ、天平12年2月に河内の知識寺（ちしきじ）に行ったときの事です。なぜ、それがわかるかというと、聖武天皇は後年の天平勝宝元年12月27日の詔で、「河内国大県郡の知識寺に坐する盧舎那仏を礼み奉（おがみたてまつ）りて自分もおつくりしようと思った」と回想しているからです。

都が平城京に戻って毘盧遮那仏は完成を見ますが、孝謙天皇に譲位したのちの天平勝宝4（752）年4月9日に、僧1万人が列して開眼供養の法会が行われました。インドから来日した僧、菩提遷那がもつ筆から綱を垂らし、孝謙天皇、聖武上皇、光明太后をはじめ文武百官がこの綱を握って大仏の目に墨を入れたといわれています。



東大寺大仏殿



毘盧遮那仏

これに関して、大角修氏は『平城京 全史解説』は、次のように述べています。

この法会の様子は疑いのない史実であるかのように言われているのだが、400年くらい後の平安末期に編まれた『東大寺要録』などの記録に拠っているので、どこまでが真実かわからない。そこで、最も信頼できる奈良時代の正史『続日本紀』を見てみると、なんと、開眼供養の記事の中に聖武上皇の名がない。これはいったい、どういうことか。

実はその頃、上皇は重い病気だった。大仏もまだ螺髪（らほつ）がついておらず、開眼にふさわしい姿ではなかったけれど、上皇の存命中に完成を祝うために急ぎ開眼供養を行うことにした。日取りは釈迦の誕生日である4月8日と決めしたが、どうも上皇は臨席できそうにない。小康を期待して、1日延ばしたけれど、結局、発眼をした主役を欠いたまま4月9日の開眼となった。おそらく、そう言うことだったろう。

遣唐使

『続日本紀』には奈良時代の外交についても、記載されています。新羅や渤海との外交も重要ですが、ここでは遣唐使について、ふれておきましょう。

ところで、遣唐使の派遣第1号は何天皇の時でしょうか？

答えは、舒明天皇の時（舒明2年＝630年）でしたね。

この、舒明天皇の奥さんは誰でしょうか？ その間に生まれ、後に天皇となった人物は誰ですか？

奥さんは皇極天皇です。間に生まれたのがのちの天智天皇と天武天皇ですね。

この時の遣唐大使は誰でしたか？

そう、犬上御田鋤（いぬがみのみたすき）でしたね。

『続日本紀』での初出は文武天皇4年（700）3月10日、はじめて火葬された道昭（どうしょう）の卒伝においてだそうです。

もうひとつ、遣唐使船のことを、俗に何と呼びましたか？

「四つの船」でしたね。だいたい4隻の船に、100人ずつくらいが唐へ渡りました。



復興された遣唐使船

遣唐使はどうも日本の朝廷には具合の悪いものだったようで、実はその記録は少ないようです。『続日本紀』でも大使の任命や出航や帰朝などの記事は散見されますが、まとまった記述は乏しいのです。遣唐使が何回派遣されたのかもはっきりしないんです。一般的な説では、任命が20回、実際に渡航して派遣されたのは15回か16回だといえます。

遣唐使の派遣が最も頻繁に行われた時期が、663年の朝鮮半島での**白村江の戦い**の後でした。日本は百済と連合して、唐・新羅連合軍と戦って敗れます。そして、唐・新羅の侵攻の脅威にさらされ、大宰府に**水城（みずぎ）**が作られました。

ところで、663年の「白村江の戦い」を覚える語呂合わせを覚えていますか？

ろくろくみないで 白村江 敗北

でしたよ。



650年以降を見ると、第2回が653年、第3回654年、第4回659年、第5回665年、第6回669年と数年おきに遣唐使が派遣されています。

しかし、天武天皇や持統天皇期には遣唐使は一回も派遣されていません。大宝元年（701）になってやっと**粟田真人**が遣唐執節使（しつせし）として大使・副使などが任命されたと記載されています。**山上憶良**が記録係として名前を連ねています。

さて、遣唐使の役目って何でしょうか？

第一は、唐の都の長安に行って、**皇帝に拝謁すること**です。実は、遣唐使は天皇の大使として日本を出て、唐につくと中国風の名に改めて「皇帝の臣下」という立場をとっていました。これは、矛盾した二重の立場ですよ。

だからこそ、正史では遣唐使について触れにくいんですね。中華皇帝から授けられたはずの国書も、天皇を「卿」と呼ぶなど臣下扱いされていますので、人目に触れないように処分してしまったと考えられます。日本側の記録に、そんな「恥」の部分は残されていないのです。

これは**聖徳太子の遣隋使**の国書で「**日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す**」と対等な関係

を主張して以来の未解決の問題です。臣下の王は毎年元旦に長安の皇宮で行われる朝賀に使者を送って皇帝に拝謁するのが義務でしたが、日本はそれをほとんどしませんでした。

遣唐使の第二の目的は、**書物の輸入**です。多数の留学生・留学僧を伴った遣唐使の一行は政治の学としての儒学を摂取することに強い関心を持ち、「皇帝から下賜されたものを金に換え」たりして、大量の書籍や経典を持ち帰りました。つまり、書物の輸入こそが遣唐使の主目的だったといえます。

この第8回遣唐使（717）から、4隻の船団で557人もの大編成になったので、派遣は10数年に一度でも、輸入される文物や知識は膨大なものになったようです。

ちなみに、第8回の遣唐使で唐に渡った人物は超大物が3人います。**留学生（るがくしょう）の阿倍仲麻呂、吉備真備（きびのまきび）、留学僧の玄昉（げんぼう）**です。しかし、『続日本紀』には、いつ出帆したのか、どこで何をしていたのか、全くわからないそうです。

聖武天皇、あるいは孝謙天皇に関係する人物が、吉備真備や玄昉です。

吉備真備は養老元年の第8回遣唐使で入唐し、第9回の遣唐使の船で帰還します。18年間も唐で過ごしました。その甲斐あって、大きな成果を持ち帰ります。『続日本紀』天平7年4月26日の条に、吉備真備が典礼の書『唐礼』130巻などの書籍、測量具、弓矢などを献上したことが記されています。そして、皇太子阿倍内親王（のちの孝謙天皇）の教育係として活躍します。

また、真備は次の遣唐使では副使として入唐し、無事に帰還します。吉備の地方豪族の下級貴族でしたが、以後、朝廷で重んじられます。実は、この2回目は「左遷」だと言えます。時の権力者藤原仲麻呂から邪魔者扱いされ、「国外追放」されたといっても良い状況でした。

一方、留学僧の玄昉も、真備と同じ時に入唐し、同じ船で帰国しました。やはり入唐学問僧として重んじられ、天平8年2月7日、食封100戸、田10町を与えられました。

実は、天平12年（740）藤原広嗣の乱が起きる前、広嗣は大宰府から「時政の得失を指し、天地の災異を陳（の）ぶ」と意見書を提出しました。僧正玄昉法師と吉備真備が天地の災難のもとだから2人を排除せよ、というのです。

なぜ、広嗣が反乱を起こしたのかというと、大宰府に左遷させられたこと。そして、右大臣橘諸兄の「右腕」が玄昉法師と吉備真備だったからと言えますね。

付け足しですが、第9回遣唐使（733）で、栄叡（ようえい）・普照（ふしょう）という2人の僧が授戒の師を求めて入唐し、日本へ来てもらうよう**鑑真**を訪ねました。でも、『続日本紀』には一切書かれてありません。

東大の入試問題です！

ここで、遣唐使に関する東大の入試問題を見てみましょう。

1985年度の問題です。

7世紀から9世紀にかけて、朝廷は、遣隋使や遣唐使を派遣した。この派遣によってもたらされたものは、当時の日本の政治および文化にどのような影響を与えたか。10行以内で述べよ。

この問題の詳しい解説は、塚原哲也先生のHPにありますので、そちらを参照してくださいね。
(tsuka-atelier.sakura.ne.jp/ronjutu/toudai/kakomon/kaisetu/kaisetu851.html)

塚原先生の解答例です。

隋・唐は律令法に基づく中央集権体制を整えており、遣隋使や遣唐使はそうした隋・唐の国家体制のあり方を伝えた。政治面では、大王家と豪族が土地・人民を個別に支配し、豪族が朝廷の職務を世襲するという体制を改め、公地公民を原則とする官僚制的な支配体制を樹立しようとする動きを促進し、7世紀後半に律令体制が確立し、さらに都城の建設、貨幣の鑄造や国史・地誌の編纂などの国家事業が展開した。文化面では、さまざまな仏教教理が伝えられ、鎮護国家思想に基づく国家仏教体制が整うと共に、現世利益を求める貴族層を中心に仏教が普及して仏教美術が開花する一方、漢詩文が貴族の教養として重んじられるなど、唐風の貴族文化が発達した。

恵美押勝の乱

奈良時代といえば、ほぼ10年ごとに権力者が交代しているという特徴があります。前回紹介したように、「ひどい 長屋に 四人の子ども、も なか どう 百円で」の7組の権力者が登場しますが、ポイントは「藤原氏→反藤原氏→藤原氏」のように交互に権力が移行しているということです。

そして、その権力者たちに対して、反乱も起きています。「橘諸兄政権」の時には藤原広嗣の乱（740）が起きていますし、「藤原仲麻呂政権」の時には、橘奈良麻呂の乱（757）が起きています。

そして、その後に起きたのが**藤原仲麻呂の乱＝恵美押勝の乱**（764）です。ここは、掘り下げてみたいと思います。

天平宝字2年（758）8月1日に、孝謙天皇は大炊（おおい）王に譲位します。26歳の**淳仁天皇**が誕生したわけです。

藤原仲麻呂は亡くなった長男の真從（まより）の妻を大炊王と再婚させ、私邸の田村邸に住まわせていましたが、その田村邸から大炊王を内裏に迎えて、皇太子にしたのです。

この辺りの所を、『平城京 全史解説』で**大角修氏**は以下のように説明されています。

大炊王の立太子は明らかに仲麻呂の計略であり、淳仁天皇の即位もその線上のことだった。この譲位には、未婚の女帝である孝謙天皇の同意もあっただろう。淳仁天皇の即位も詔には、孝謙太上天皇に上台（上台宝字＝じょうだいほうじ称徳皇帝）、光明皇太后に中台（中台天平應真仁正＝ちゅうだいてんぴょうおうしんにんしょう皇太后）の尊号を奉り、それを太上天皇も受け入れた。

8月26日、藤原仲麻呂を大保（だいほう＝右大臣）に任じる。この時期、太政大臣と左大臣はいないので、最高の官職である。そして、藤原仲麻呂の功績をたたえ、恵美押勝（えみのおしかつ）の名を与えた。その勅によれば、仲麻呂は「汎恵（はんえ）の美＝広く恵みを施す美德、斯（こ）れより美なるは莫（な）し」として、姓に「恵美」の2字を加え、「暴（ぼう）を禁じ勝（ごう）に強ち、戈（ほこ）を止（とど）め乱を静む」ゆえに「押勝」と名づけるという。

さらに封3000戸と田100町を与えて永く相続を許しただけでなく、鑄銭と出拳（すいこ）に恵美の家印を使うことを許した。仲麻呂の私印を公印に準じたのである。

天平宝字3年6月16日には、光明皇太后の詔によって淳仁天皇の父の舎人親王に皇位の称号を贈り、崇道尽教（すどうじんきょう）皇帝と称した。舎人親王は天武天皇の皇子だから、皇位の血統は天武→崇道（とねりしんのう）→淳仁とつながることになる。それは、天武→草壁皇子→文武→元明・元正→聖武→孝謙とつながってきた草壁皇子の皇統とは異なり、後年の道鏡事件の背景となる。

天平宝字4年1月4日、空位だった太政大臣（大師）に恵美押勝＝仲麻呂を任じた。ここに仲麻呂の権勢は極まるのだが、その年に光明皇后が没すると、孝謙上皇との溝が深まった。

孝謙天皇（上皇）は母の光明皇太后が活着している間は、藤原仲麻呂ともうまくやっていました。ところが、光明皇太后が亡くなり、仲麻呂の権勢が強くなっていくにつれ、孝謙と仲麻呂との間は気まずくなっていきました。仲麻呂は、淳仁天皇を楯に威張り散らしたのかもしれないね。

そして、仲麻呂は近江に平城京の陪都（ばいと、副都）を作って、そこを拠点にしようとしています。仲麻呂の祖父不比等は淡海公で、父武智麻呂は近江守で、仲麻呂も近江国守であったので、近江は元々、縁故の深い土地だったからでしょう。

天平宝字5年10月28日、「平城京の改築のためにしばらく近江国の保良宮（ほらのみや）にうつる」と淳仁天皇は詔し、「朕思う所ありて北京（ほっきょう）を造らんと議（はか）る」という。北京とは南の平城京に対して保良宮をさす。

遷都である。孝謙上皇も高位の官人たちも居を移した。

あくる天平宝字6年2月2日、従一位であった「藤原恵美朝臣押勝」に正一位を授ける。これは貴族の最高身分だ。・・・・・・・・・・・・・・・・

都は奈良に戻った。しかし、孝謙上皇と淳仁天皇の仲が険悪となり、上皇は内裏ではなく法華寺に住むことになったのである。女の上皇に尼寺に入られては、官人たちは容易に近づけない。そこから近臣を通じて勅を発するので、実に困った事態となる。

5日後の同月28日、仲麻呂に帯刀資人（たちはきとねり）60人が加給され、身辺警護の武装従者が百人になった。身にせまる危機を感じてのことだろう。

6月3日、五位以上の官人が朝堂に招集され、淳仁天皇の詔が「太上天皇の御命以（おおみこともち）て卿等（おおつきみたち）諸（もろもろ）に語らへと宣（の）りたまはく」と宣明した。淳仁天皇が孝謙上皇の言葉を告げるというのだが、その内容はなんと淳仁天皇自身の権限を奪うものだった。

孝謙上皇は、淳仁を立てたが、年月がたつにつれて帝は自分を軽んじるようになり、・・・仲麻呂にそそのかされて、言ってはならないことを言い、あるまじき振る舞いもしたという。

孝謙上皇は、自分にはそのように非難されるいわれはないが、これは自分が劣っているゆえだから恥ずかしく思う。また、菩提心（さとりを求める心）を起こした縁によって出家して仏の弟子になったという。

ここまでは前置きで、以下の「結語」が孝謙上皇の宣明の実質的な部分だと大角修氏は強調されます。

「但し政事（まつりごと）は常の祀（まつ）り、小（いささけ）き事は今の帝、行ひ給へ。国家（みかど）の大き事、賞罰二つの柄（もと）は朕（われ）行はむ。かくの状（さま）、聞きたまへ悟れと宣（の）りたまふ御命（おおみこと）を衆（もろもろ）聞きたまへと宣る」

なんと、孝謙上皇は出家の形を取ることで政権を奪還したのです。これは、平安時代末期の法皇が行った院政と似てますよね。

それにしても淳仁天皇は、なぜ、「これからは小事のみまかせる」というような屈辱的なことを自身の詔において諸官人に告げなければならなかったのでしょうか？

これは仲麻呂に対する官人たちの反感が、それほど強まっていたということなんでしょう。逆にいえば、この時点で孝謙上皇が大勢の支持を得ていたということになります。

では、孝謙上皇の政権奪還に対して藤原仲麻呂はどうしていたのでしょうか。

不思議なことに、『続日本紀』にはしばらく仲麻呂の名が出てこないそうです。再び登場するのは、天平宝字7年2月4日、「太師藤原恵美朝臣押勝、宴を高麗（こま、渤海）の客に設（もう）く」という箇所です。太師は太政大臣のことだから仲麻呂は失脚したわけではありません。

その後、再び仲麻呂は『続日本紀』から姿を消してしまいます。そして天平宝字8年9月2日、「太師正一位藤原恵美朝臣押勝」と登場し、「都督（ととく）四畿内三関近江丹波播磨等国兵事使（とうのくにひょうじし）」に任じられます。

この大げさな職は**三関**の内側の畿内一体の軍団を統率して訓練するもので、仲麻呂が孝謙上皇に働きかけて認められたのだといいます。権力の回復を焦ったのでしょうか、これが反乱の準備と見なされ、仲麻呂はかえって窮地に追い込まれていきます。

ところで、**三関（さんげん）**とは、どこの関所でしょうか？

鈴鹿・不破（ふわ）・愛発（あらし）の関ですね。東海道の伊勢国鈴鹿関、東山道的美濃国不破関、北陸道の越前国愛発関のことです。なお、愛発関はのちに近江国逢坂の関に変更されます。

この続きをみてみましょう。

9月11日、「仲麻呂の謀反がはっきりした」と上皇は少納言山村王に淳仁天皇がいる中宮院に行って**鈴・印（駅令と天皇御璽）**を持ってくるように命じた。駅令は国家の王権を象徴する官道の印で、御璽とともに天皇の国事に必須のものだ。

その一行らを、仲麻呂は子の訓儒麻呂（くすまろ）らに待ち伏せさせて鈴・印を奪った。上皇は坂上田麻呂らに訓儒麻呂らを射殺させるなど、鈴・印を奪い合って射殺し斬り殺す騒ぎが起こった。ついに上皇が「恵美押勝と子孫が兵を起こして反逆した。よって官位を剥奪し、財産も没収する」と勅を発し、ただちに使いをやって三関をかためた。同時に藤原北家の永手、吉備真備らの官位を上げた。これは仲麻呂らの解任による空白を埋めるとともに朝廷を反仲麻呂派でかためるためだろう。

その夜、仲麻呂は近江に逃げ、官軍が追った。

9月14日、仲麻呂の兄で左遷されていた豊成を再び右大臣に任じる。藤原南家の長子をもり立てて南家の分裂をはかり、仲麻呂に従うものを減らすためであろう。

9月18日、仲麻呂は斬殺され、首が都に届けられた。

うーん、橘諸兄の後を受けて権力を握った藤原仲麻呂でしたが、孝謙上皇と対立した結果、死に追いやられてしまったのです。仲麻呂にとっては残念なことですが、あまりに独裁的な政治をした結果、官人たちを敵に回してしまったようですね。孝謙天皇の後を継いだ淳仁天皇も人臣からの支持を取り付けることができませんでした。仲麻呂の操り人形に過ぎなかったからでしょうか。

もっと言えば、仲麻呂が天皇として敬うような言動を取らなかったことが、孝謙天皇の不信を買ったのかもしれない。そして、孝謙天皇が信頼する吉備真備らを政界から追放するような政策を取ったことで、ますます、孝謙と仲麻呂の間の信頼関係は崩れていったのだと思います。

吉備真備



吉備真備

あなたは、吉備真備ってどんな人か、知っていますか？

それほど有名じゃないかもしれませんが、実は、私が好きな人物なんです。なぜかという、吉備真備は、長い日本の歴史の中で、たった二人しかなしえない記録をもっているからです。

それは、「優れた学者でありながら、政治のトップ級の右大臣にまで上り詰めた」ということなんです。これは、日本の歴史の中で吉備真備と菅原道真のたった二人しかなしえなかった偉業なんです。もちろん、藤原仲麻呂＝恵美押勝の野望を打ち砕いた人物で、スカッとさせてくれるからです。まさに、「倍返し！」した人物として尊敬できる人物なんです。

ただし、吉備真備は二度までも遣唐使として唐に渡っていますが、菅原道真は遣唐使として唐に渡ることはありませんでした。むしろ、遣唐使そのものを廃止したことで、有名ですよ。

「道真が 白紙（894）に返す 遣唐使」という語呂合わせ、覚えていますよね。

さらにいえば、菅原道真が大宰府に左遷されて、そこで生涯を閉じてしまっているのに対し、真備の場合、左遷させられはしましたが、要職に復帰します。また、道真が亡くなった後、「怨霊」として藤原時平などに「復讐」したのに対し、吉備真備は「生きたまま」藤原仲麻呂に「復讐」しているところなどが違いますね。

そして、このことが菅原道真が「天神さん」として今なお親しまれているのに対し、吉備真備は「知る人ぞ知る」人物になっている理由でしょうか。

つまり、日本人は源義経のように敗者を好む「判官贔屓（ほうがんびいき）」の人が多いと言われていすよね。吉備真備が菅原道真ほど有名でなかったり親しまれていないのは、道真が不遇の死をとげ

たのに対し、真備は官位も上り詰め、しかも天寿を全うしたからでしょうか。（もちろん天満宮の存在も大きいと思います）

ところで、吉備真備は、現在の岡山県倉敷市真備町出身ということなので、一昨年（平成30年7月）の大雨により、被害を受けた地域の出身なんですね。

霊龜2年（716）に遣唐留学生となり、翌養老元年（717）に阿倍仲麻呂・玄昉らと共に入唐しました。唐ではなんと18年もの間、様々な学問を学びました。天平7年（735）に玄昉と同船で帰路に就き、多くの経典などを携えて帰国します。

帰国後は、聖武天皇や光明皇后の寵愛を得て、天平7年（735）中に従八位下から一挙に10階級昇進して正六位下になってから、とんとん拍子に出世していきます。天平10年（738）に橘諸兄が右大臣に任ぜられて政権を握ると、玄昉と共に重用され、真備は右衛士督を兼ねます。

しかし、先に述べたように、天平12年（740）に、真備と玄昉を除こうとして藤原広嗣が大宰府で反乱を起こします（藤原広嗣の乱）。天平13年（741）には東宮学士として初の女性皇太子・阿倍内親王（後の孝謙天皇・称徳天皇）に『漢書』や『礼記』を教授します。つまり、吉備真備はのちの孝謙天皇の家庭教師になり、信頼を得ることになります。

さらに、天平18年（746）に、吉備朝臣の姓を賜与され、天平勝宝元年（749）には従四位上に昇りました。

そして、天平15年（743）8月、孝謙天皇が即位しますが、光明皇后の信任厚い藤原仲麻呂が権力を握り、真備や玄昉、諸兄と対立することになります。その結果、玄昉は天平17年（745）筑紫観世音寺別当に左遷され、翌年に同地で亡くなります。玄昉としては、さぞ悔しかったでしょうね。

一方、吉備真備も天平勝宝2年（750）に地方官に左遷され、さらに翌年（751）には遣唐副使に任命され、天平勝宝4年（752）に再び入唐することになりますが、これは仲麻呂によって国外追放されたというのが真実でしょう。そして、この時、前回の遣唐使で唐にわたった阿倍仲麻呂と再会します。

今回の唐での滞在は短く、翌年の天平勝宝5年（753）に帰国の途に就き無事に帰国しましたが、中央政界での活躍は許されず、天平勝宝6年（754）に正四位下・大宰大貳に叙任されて九州に赴任します。

藤原仲麻呂からは冷たい仕打ちを受け続けますが、新羅に対する防衛や唐の安祿山の乱に備えるよう勅を受けます。実は吉備真備は「日本の兵法の祖」と言われるほど、戦略戦法にすぐれていたのですね。（中世の兵法書などでは、張良が持っていたという『六韜三略』の兵法を持たらしたとして、真備を**日本の兵法の祖**としているそうです。また、陰陽書『刃辛内伝』を持たらしたとして、真備を**日本の陰陽道の祖**としています。）

さらに、天平宝字8年（764）、造東大寺長官に任ぜられ、都に復帰します。なんと、この時70歳でした。この年に発生したのが恵美押勝＝藤原仲麻呂の乱なんですね。孝謙上皇の信頼が厚いことから、

緊急に従三位に昇叙され、中衛大将として追討軍を指揮して、優れた軍略により乱鎮圧に功を挙げます。

天平神護2年（766）、称徳天皇（孝謙天皇の重祚）と法王に就任した弓削道鏡の下で中納言となり、同年の藤原真楯薨去に伴い大納言に、次いで従二位・右大臣に昇進して、左大臣の藤原永手と共に政治を主導しました。これは地方豪族出身者としては破格の出世であり、先ほど述べた通り、学者から立身して大臣にまでなったのも、吉備真備と菅原道真だけですね。



吉備真備の活躍を描いた『吉備大臣入唐絵巻』（ボストン美術館所蔵）より

東大の入試問題です！

それでは、東京大学の入試問題、1997年度の問題もみてみましょう。

次の文章を読み、下記の設問に答えよ。

775年に81（または83）歳で没した吉備真備は、吉備地方の豪族の出身である。717年に遣唐使に従い留学、よく経史を学び、「日本の留学生で唐で名をなした者は真備と阿倍仲麻呂の二人のみである」とまで称された。735年に、多くの書物などを携えて同期の留学僧玄昉らとともに帰朝、その最新の知識は朝廷で重んじられた。のちの孝謙天皇の皇太子時代の教師となったのもこの頃である。740年には、重用される玄昉や真備の排除をめざして藤原広嗣が大宰府で反乱を起こしたが、鎮定された。やがて藤原仲麻呂が権力を持つと左遷され、さらに751年には入唐副使となって再び唐に渡った。帰国後は大宰府の次官となり国際的緊張下に筑前国の怡土城を造った。のちに京にもどった真備は、764年の藤原仲麻呂の乱では、兵法の知識をいかして孝謙上皇側の参謀として乱の鎮圧に活躍した。その後、称徳天皇のもとで真備は昇進を重ね、766年にはついに右大臣にまで上った。

設問

A 吉備真備は二度にわたり唐にわたった経験をもつ。古代の遣唐使が日本にもたらした制度や文

物について、具体例をあげながら4行以内で述べよ。

B 多くの政治的争乱がくりかえされた中で、地方豪族出身の吉備真備は、なぜ長期にわたって政界で活躍し、右大臣にまで上ることができたのだろうか。その理由について、考えられることを3行以内で述べよ。

こちらも、塚原哲也先生のHP (tsuka-atelier.sakura.ne.jp/ronjutu/toudai/kakomon/kaisetu/kaisetu971.html) にアクセスしてくださいね。どうやって、東大の問題を200字程度でまとめていったら良いのか、ということもわかってきますよ。

塚原先生の解答例です。

A 律令制度が導入されて中央集権国家の形成が進み、唐にならって都城の建設や貨幣の鑄造・国史の編纂などが行われた。鎮護国家思想に基づく国家仏教体制が整備され、貴族の教養として漢詩文が重視された。また、さまざまな美術工芸品やその技術が伝えられた。

B 吉備真備は二度にわたって入唐した経験から唐の最新知識をもち、兵法家としても有能で、国際関係にも精通した貴重な存在であったうえ、皇太子時代から孝謙＝称徳天皇の厚い信任を受けていた。

次号に続く